

一週間で国語の勉強を好きにする法

京都女子大学教授

吉永 幸司よしなが こうし

「大変だったよ」に答えて

武君（仮名）は元気な少年であった。学習より遊びが好き。授業の後半では勉強より運動場を確保することに気をとられ、勉強どころではないというくらいエネルギーをもてあますほどの子であった。その彼が、

「今日は、登校してくるのが大変だったよ。電車は満員で、体がぎゅっと押しつぶされそうで…」

と、登校がいかに辛かったかという意味のことを話しかけてきた。普段でも満員の電車が事故を起こしたときの混乱ぶりは十分に予想できた。

「大変ななかを登校してきたのだから」という思いもあり、国語の授業の最初の音読を彼にさせた。それほど上手に読めたわけではなかったが、

「とても、よい声で読めましたよ。」

と伝え、「武君はとてもよい声で音読をしました。」とその日の学級通信でトップニュースにした。「大変ななか

を登校してきたんだ。」といういたわりのような気持ちを込めて書いた。

二 得意を増やす

学級通信のトップニュースが気に入った彼は、その夜、仕事から帰ってきたお母さんに、

「国語の勉強でほめてもらった。学級通信にも出ている。」と勢い込み、その授業を再現すべく音読を始めた。

「学級ニュースのトップになるほど上手な読み方とも思えませんが、先生のお考えがございまして、ようから自信をなくさないよう、ほめておきました。」

翌朝、連絡帳にこんなお母さんのコメントが書かれていた。確実に家庭に伝わっていることがうれしく、

「武君は昨日、お母さんに音読を聞いてもらったようです。上手に読めたとお母さんがほめておられました。みんなで武君の音読を聞こう。」

と働きかけ、昨日と同じ範囲を音読させた。数回読んで

いる範囲であったので、なめらかに読んだ。

学級通信に再び、授業の様子や彼の得意になりつつある音読の上達ぶりを伝えた。

「家で教科書を開いたことがなかったのに、今日も音読の勉強をしています。昨日よりは上手に読んでいます。明日も一番に手を挙げるといつて張り切っています。」

お母さんからの連絡帳に心えて音読のときには、必ず彼を指名した。読むたびにことに上達している様子を子どもたちは見逃さなかった。彼の得意を増やすように努めた。

三 活躍の場所を自覚させる

「ここは音読の上手な人に読んでほしいのだけど…」

という、子どもたちの視線が彼に注がれる。彼も自分の出番とばかり拳手をするという学習場面が繰り返されるようになった。今まで、いつ授業が終わるのかということ

を気にしていた彼が、気がついたら確実に音読上手の位置をもち、活躍の場所を自覚するようになっていた。

国語の勉強は、どこかに自信がもてると、速度を加えて他の活動にも及んでいく。一週間で少し超えたところから彼は、「国語が好き」と口にするようになっていった。

四 「国語が好き」と言えるようにさせたもの

まず、家庭の様子を連絡帳を通して伝えてくださったお母さん。彼の上達を見逃さなかった子どもたち。自分の出番を自覚した武君というように、「国語が好き」にさせる要因はいくつかある。

指導ということからいえば、子どもの中にある良さを見つけたとき、徹底して、それを伸ばすことにこだわることで、繰り返し良さを伸ばす学習の機会を与えることがある。きつかけさえあれば伸びるという確信を与えてくれた、大切にしている武君との出会いである。

